

## KONRAD LORENZ

### 競い

商業上の競争は、今日、すくなくとも、石器時代の人間の種族間での闘争が、人間の種内攻撃性を高めたのと同じように、もろもろの恐ろしい衝動を、恐ろしいまでに育てあげてゆく作用がある。

『攻撃 —悪の自然誌—』

つまり、人間は、自分の仲間との競争を強いる、神経的、精神的重荷に耐えている。

まったく気違いじみた競争の増加の中に、進歩を認めるように、ごく幼い子供のときから教育されているとはいえ、彼らの中でも、もっとも進歩的な人々の眼には、自分たちをかりたてている不安がきわめてはっきりと見えるのであり、才能があつて、いちばん「時代と共に歩んでいる」ものが、特に早く心筋梗塞で死ぬのである。

『人類が地球に残した八つの大罪』

## 社会

人口が多くなりすぎると、個人的な結合にとってつごうが悪くなる。

本当の親友はごくわずかしかもてないというのは、真実だ。

社会が大きくなると、いやおうなく「知り合い」がふえるので、個々の連帯の強さが低下してしまう。

第2に、狭い場所に多くの人間がひしめいていると、あらゆる社会的反応がわずらわしくなる。

大都会に住む近代人はみな、さまざまな社会的関係や義務に食傷しているから、友人の訪問について、たとえ彼を本当に愛しており、長く会っていないという場合ですら、もはや当然あるべきほどに喜ぶことができない。

夕食を終わってくつろいでいるところに、電話のベルが鳴ると、つい不平を言いたくなるという気持ちは、だれでも身に覚えがあるだろう。

狭いところにつめこまれていることの結果、攻撃行動を起こしやすい状態になるというのは、実験社会学者がすでにとっから知っていることである。

## 現代人の無味乾燥

青年が、深く懐疑的であると嘆く人が多い。

この現象は、しかしながら、かつて人々、ことに若い人々が、完全にだまされた、作られた理想、熱狂を開発するわなに対して、反対するところの、それ自体健全な防御から発しているのだとわたしは信じている。

『攻撃 一悪の自然誌一』

多くの若者が、今日の社会秩序に対して敵意を感じており、また、自分たちの両親にも敵意をもっている。

そうした姿勢にもかかわらず、彼らがこの社会とこの両親に養われることを当然だと思っていることから、彼らが無反省な幼児であることがわかる。

人口過剰も商業の競争も、自然環境の破壊も、自然に対する畏敬の念をおこさせる調和からの疎遠化によってひきおこされた強い感性の減弱も、すべて、いっしょにはたらいで、何が善で、何が悪であるのかの判断力を近代人から奪っている。

けれども、非社会的な人間の弁明は、その逸脱が、遺伝的心理原因にあるという見解を、私たちに強いている。

『人類が地球に残した八つの大罪』

## 伝統の破壊

進歩しつつある工業化の流れに家族の構造を従わせてきた変化は、いずれも親と子の接触を弱める方向に作用してきた。

このことは、すでに乳児の時代からはじまっている。

母親が自分の時間を全部子供にささげることができないために、今日、程度に差はあれ、ほとんどいつでも、ルネ・スピッツのいうホスピタリゼーションが発生している。(入院、治療が必要な人格崩壊)

その最悪の兆候は、人間がふれあう能力の、治療困難な、あるいは不可逆的な減少である。

その効果は、すでに述べた人間の同情心の障害とともに、危険なところまで蓄積されている。

多くの人間がひじょうに狭い空間にとじこめられている結果、人と人との関係が渴れはて、砂の中に消え去ってしまうことをつうじて、間接的に非人間化現象が生じるだけではない。

直接に攻撃行動も解発される。

大都会ならどこでもふつうにみられる不親切ぶりは、明らかにその場所にいる群衆の密度に比例している。

たとえば、ニューヨークの大きな駅やバスターミナルでは、人々はびっくりするほど不親切になっている。

造反する若者に何か一言いえば、たいていは憎い「体制」を守ろうとするとみなされてしまう。

私たちが憎んでいる若者たちに、彼らが必要としている親切をほ

どこすことはむずかしいだろう。

文化の発達の中で生じたものが、系統発生でうまれてきたものと同じように、変えにくく、また、畏敬の念をおこさせるということを彼らに伝えるのはむずかしいだろう。

文化がロウソクの炎のように消されてしまうことがあるのだということを伝えるのは、むずかしいだろう。

## 『人類が地球に残した八つの大罪』

### 人間性喪失

はじめの四つの章に述べた文明病がなかったならば、人間から最後の支柱を奪うおそれのある、危険な流行による科学の教化はおこらなかったであろう。

- 避けがたい個性の喪失や情報の欠落をともなう人口過剰
- 畏敬の念をもてなくなる自然からの疎遠化
- 実利主義的な考え方で財産を自己目的化させ、本来の目標を忘れさせる人間同士の商業競争
- そして、またなによりも、感性の平坦化

これらのものは、どれも、科学の人間性喪失の減少に反映している。それらは、科学の人間性喪失の原因であって、結果ではないのである。

## 核兵器

私はいずれ、原爆が投下されなくなるということについては、人類の他の七つの大罪に関する事より、楽観的である。

今日、核兵器の脅威が人間にあたえている最大の害は、核兵器が使われていないときですら、「世界破滅のムード」(気分)を生み出しているところにある。

原始的な望みを単純に、インスタントに満足させようとする無責任で幼稚な衝動と、遠い未来におこる責任を負うべき事から対する、それにふさわしい無頓着さは、何を決断するときにも、世界があとどれくらい存在するのだろうか、という気がかりな疑問が無意識のうちにからんでくるということと、むすびついていることはたしかである。

## 「人間が地球に残し続けている八つの大罪」

### まとめ

私は、本来密接的な関係があるが、互いに区別できる八つの過程について述べてきた。それは私たちの現代文明ばかりではなく、種としての人類をも破滅させるおそれがある過程である。

それは

第1に、地球上の人口過剰である。

多すぎる社会的な接触のために、私たちは、誰もが根本的に、「非人間的な」方法で自らを守らざるをえない。

また、それに加えて、多くの個人が、せまい空間にすしづめにされていることが、直接的に攻撃性を開発するように作用している。

第2は、自然の生活空間の荒廃である。

私たちの住んでいる外部環境が破壊されているだけではない。人間自身の内部でも、人間をとりまく創造物の美しさや偉大さをおそれる気持ちが破壊されている。

第3は、人間同士の競争である。

競争の結果、人間破滅のための技術の発達はますますはやまり、人間は真に価値のある、あらゆるものが見えなくなり、反省、という、まことに人間らしい行為に専念する時間を奪われている。

第4は、虚弱化による豊かな感性や情熱の萎縮、である。

工業や薬学の進歩のために、ごくわずかな不快刺激にも耐えられなくなっている。そのために、障害を克服するときのきびしい苦勞をつうじてしか得られない、よろこびを感じる人間の能力は低下している。

悲しみと喜びの対照という、自然の意志によるうねりは、いうにい

われぬ、倦怠の知らぬ間のひろがりのうちにきえてしまう。

第5は、遺伝的な衰弱である。

社会が大きくなるにつれて、社会的な行動規範はますます必要になるのに、近代文明の内部には、——「生まれつきもった正義感」と、うけつがれてきた多くの法の伝統を除けば——社会的な行動規範の維持や発達に対して、淘汰を加える要因はなにひとつ存在しない。

「造反している」現代の若者の大部分を、社会の寄生者たらしめている多くの幼児化現象が、おそらく遺伝的にきめられているということも例外ではない。

第6は、伝統の崩壊である。

伝統の崩壊は、若い世代がもはや、古い文化的伝統とうまく和解できなくなり、ましてやそれと一体化することができなくなる臨界点に達することによって、ひきおこされている。

そこで若者たちは、古い世代を、「異教徒集団」のように扱い、それに国家的憎悪をもってたちむかう。

このように、一体化が乱れる原因は、なによりも親と子の間の接触が欠けているところにある。

病は、すでに乳幼児の頃にはらまれているのである。

7番目は、人類の教化されやすさの増加である。

唯一の文化集団に集中している人間の数の増加は、世論に干渉する技術の完成と結びついて、人類史の、いかなる時代にも見られな

った、世界の画一化（かくいつか）をひきおこす。

さらに、かたく信じられている教義の、暗示的な作用が、その信奉者（しんぽうしゃ）の数とともに、おそらくは幾何級数的（きかきゅうすうてき）に増加している。

今日ですら、マスメディアの影響、たとえば、テレビの影響を意識的に避ける個人は、しばしば、病的であるとみなされる。

非固体化効果は、大衆を操作しようとする、あらゆる人々に歓迎されている。

世論調査や宣伝技術、それに、巧みに（たくみに）操縦された流行は、鉄のカーテンのこちら側では、大企業、向こう側では官僚が、同じように大衆を支配するのを助けている。

8番目に、核兵器をもった人類の軍拡が、人類に危機をひきおこしている。

この危機は、前に述べた7つの現象がひきおこす危険にくらべて、避けやすいものである。

えせ民主主義的な教義は、7番目までの人間性喪失の過程を促進している。

この教義は、人間の社会的な行動や、道徳的な行為が系統発生で進化した、神経系や感覚器の体制によってきまるのではなくて、もっぱら、人間の個体発生の途中で、そのとき、そのときの文化的環境をつうじてえられた、「条件づけ」によって左右されるというものである。

『人類が地球に残した八つの大罪』

第一の規範は、自明のことである。

「汝自身を知れ」

なんじ自身を知れ。

自分自身を知れ。

という、アポロ神殿に掲げられている言葉だ。

これは、わたしたちに、自分の行動の諸原因の連鎖を洞察する目を深めてほしいという要求を現わしているのである。

わたしはまず、自分が知っていることから話しをはじめ、順を追って、わたしがきつとそうに違いないと考えていることに移った。そしてこの最後の数ページを、わたしが信じていることの告白で結びたい。これは、自然科学者にも許されることだと思う。

わたしは、要するに、真理の勝利を信じている。

自然とその諸法則に関する知識が、しだいに万人の共有財産になると信じている。それどころか、もうそうなることはまちがいないと確信さえしている。知識の増大は人間に真の理想を与え、同様にユーモアの力の増大は、人間に偽りをあざ笑う助けとなるだろうと信じている。

このふたつを合わせただけでも、望ましい方向へ淘汰を進めてゆくのに十分だと思う。旧石器時代からついこの間まで、最高の美德と思われていた男の幾多の特徴、当時は高度に熱狂を解発する作用のあった、「祖国なくて何の正邪ぞ」といった幾多の標語は、今では物を考える人なら危険だと思うだろうし、ユーモアを解する人にはこっけいに思われるのだ。

わたしには、種の変遷（へんせん 移り変わること）の偉大な設計者が、人類の問題を、その種内攻撃性を完全にとり払うことによって解決してくれるとは、どうしても信じられない。そのようなことは、今までこの設計者たちが用いてきた方法にはまったくそぐわないことなのだ。もし、ある衝動が、一定の、あらたに登場した生活状況の中で害を及ぼしはじめても、その衝動がそっくりと、のけられることはけっしてない。そんなことをしたら、その衝動のもつ不可欠な働きまでみな捨て去ってしまうことになる。それよりもむしろ、つねにある特別な抑制のしくみがつくりだされるのであって、そのしくみがそうしたあらたな状況に適応し、この衝動の有害な作用を防ぐのである。

幾多の生物の進化の途上で、ふたつ、あるいは多くの個体が平和に協働していけるように、攻撃性が抑えられねばならなかったときには、個体間の愛と友情の連帯が生じた。わたしたち人間の社会秩序も、この連帯の上に組み立てられている。

今日、あらたに登場しつつある人類の生活状況が、抑制のしくみを必要としていることは論をまたないが、そのしくみは、わたしたちの個人的な友人に対してばかりではなく、すべての人間に対する攻撃行動を抑止するものでなければならない。このことから導き出されるのは、わたしたち人間どうしは、人物を問題としないで、すべて、愛しあうようにという、当然の、いやまさに自然の声にほかならぬ要請である。

この要請は別に新しいものではなく、わたしたちの理性はその必要を、わたしたちの感情はその高貴な美しさを完全に把握することができる。だが、それにもかかわらず、わたしたちは、わたしたちの本性ゆえに、この要請を満たすことができないのである。愛と友情というゆたかで暖かな感情を、わたしたちは個人に対してしか感じる

ことができないのだ。そのことは、最善、最強の意志をもってしても、いかんともすることができない。

けれど、かの偉大な設計者たちには、それができる。

わたしはかれらがそれをやるだろうと信じている。

というのは、わたしは人間の理性の力を信じており、淘汰の力を信じており、理性が理性的淘汰を進めていくと信じているからだ。

きつとこのことがわたしたちの子孫に、あまり遠くない将来、真の人間らしい存在の、あの、最大にして、最も美しい要請を満たす能力を与えてくれることであろう。

『攻撃 —悪の自然誌— 最終章 希望の糸』